
けいおん！ † - ラブコメ f f - † ~ 紬の恋物語 ~

自分不器用ですから

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

けいおん！＋ラブコメディ＋ 紬の恋物語

【Nコード】

N9827T

【作者名】

自分不器用ですから

【あらすじ】

ラブコメディの第2弾となる今作。主人公は圭輔と紬の2人。

あるパーティーに呼ばれ、そこで起きた出来事から圭輔の平凡な毎日とは終わりを告げる事になる。それは学生兼SPというつもりもない日常に放り込まれ、お嬢様である琴吹 紬のSPをやる事になってしまう。

突如としてただの学生から紬のSPとなった圭輔、もちろん音楽あり、笑いあり、泣きあり、そしてアクションありと波乱万丈生活が幕を開ける。

プロローグ―受難のはじまり？―

「不幸だ・・・」

始まりの開口一番にそんな事を口走る少年、遠藤 圭輔。

彼は今日は同じ部活のメンバーで同級生の女の子の家に【遊び】に来たはずだった。

「遊びに来てというから来てみたが、何故・・・何故・・・」

目の前に広がっているのは白いシートがかぶせられたテーブル群に豪華な料理が置か

れていて【会場】にはタキシード、ドレスに身を包んだ紳士・淑女、子息、令嬢が揃

う中、ただ遊びに来ていた彼はというとライブなどで来ている黒のレジャージャケッ

ト、文字入りの白のシャツに黒のズボン、ワンポイントでチェーンを足につけている。

普通に友達の家に行く分にはかなりお洒落に纏めている、これでも一応、令嬢の家だ

からいつもよりと思ってこれにしたのだが想像の遙か上に行く状況だった。

「（クス・・・クス）」

案の定、この場所では場違いな圭輔は笑われてしまう。

「あら？遠藤君じゃないの、どうしたの、こんな場所に」

「へ？」

顔を上げると目の前に立っていたのは1学年先輩の蒼井 茜雫。

何を隠そう彼女は世界的に有名な蒼井財閥の令嬢にして次期社長、そして世間を知

るために普通の学生が通う桜ヶ丘高校に入学し、今現在はジャズ研の副部長である。

そして今に至る理由について茜雫に説明すると可笑しそうに笑い出した。

「ふふっ、それは遊びに来るだけなら十分ね。いいじゃない、カッコいいと思うわ」

そういうと圭輔を立ち上がらせて指を鳴らすと茜雫の執事が現れて飲み物を渡す。

「もう少し洒落た服でも来て来ればよかったですかね？」

「他と一緒にする必要はないわ、あなたはあなたらしくしていればいいの」

もったグラスを圭輔のグラスに打ち合わせて乾杯と飲み始めた。

「なんだか茜雫先輩・・・今日は先輩らしい事いいますね」

こう言った瞬間ににっこりと令嬢の微笑みの仮面を被った茜雫が肩を掴んでくる。

「遠藤君？わたしとちょっと畳の上で優雅に伝統的な舞などいかが

かしら？」

しかも圧倒的な圧力を持って。

「それは回し蹴りやら正拳突きやらで踊る激しい組手試合というなの舞ですか？」

「そう、あなたの場合はちょっと刺激的な方が嬉しいでしょ？」

「俺はいつからそんな特殊な属性がついてんすか・・・丁重にお断ります」

「（ヒソヒソ・・・ヒソヒソ）」

そんな中、またヒソヒソ話が聞こえて見ると今度は驚いた顔でこっちを見ている。

「（橘さん・・・今度はあの人ら何を話してるんすか？）」

「（お嬢様と軽々と談笑をしているのを驚かれていますのでしょう。こういった世界

ではお嬢様に話しかけるのでもかなり神経を使う事、それを何の気兼ねなしに

やってしまわれた圭輔殿に対してでお嬢様もこう軽く話をされませんかから）」

改めてこの先輩は凄い人なんだなぁと今更、再確認する圭輔だった。

「遠藤く〜ん！」

「おっ、この声は」

やっと聞き慣れた声が聞こえたので振り返るとブロンドの髪を揺らした女の子がこちらに駆け寄ってくる。

この女の子が圭輔と同じ高校に通い、同じ軽音部でメンバーの琴吹紬である。

「おおーっ、【遊びに】来たぞ、琴吹」

メンバーとなつてまだ間もないので紬の事はまだ【琴吹】と圭輔は呼んでいる。

今回、呼ばれたのもたまたま街で彼女を助けた事が理由でもあった。

「この間ありがとう、遠藤くん。お陰で助かったわ」

「別に構わねえよ。てかあの街中で琴吹みたいなのが歩いてたらナンパの鴨だろ」

そのブロンドの髪もそうだがスタイルもよく、その時もチャラ男からナンパされていた。

「とりあえずそいつに睨み効かせたら逃げたんで。案外、軽かったッスよ」

「考えてみると前のあなたって超が付くほど目つきが悪かったものね、ふふっ」

「悪くございましたね、目つき悪くて。前は色々あって突っ張って

たんですよ」

これも最近は軽音部の影響を受けたからだろう。あの場所を知って随分と丸くなった。

「遠藤くん、とってもカッコいい、その服」

そういった紬がほんわかとした笑みで主輔の服を褒めてきた。何とも和む笑顔だ。

「ははっ、ありがとさん。琴吹」

そんな中、紬に近づいてきた人物がいる。見た感じ、外国人でどこかの子息らしい。

「How are you? pongee Let's talk by all means with me」

（ごきげんいかがですか、紬さん？わたしと是非、お話をしましう）

「I'm sorry because it speaks with the friend now」

（すいません、今、友達と話をしているので）

Moreover, could you make it?」

（また後になってくれませんか？）

だが男の方は引く様子もなく、しつこく紬に話をしようと迫っているようだ。

「（先輩、これも有名な家なんすか？）」

「（確かイギリスの貴族生まれだったかしら？前にも催し物で絀に無視されたわね）」

どうやら懲りずにやってきたようだが絀の方は相変わらずあまり相手にしていない。

何となくだが誰とでも付き合えそうなイメージの彼女もしつこいは苦手らしい。

「I want to talk with the friend and me .」

（わたしは友達とお話がしたいんです。）

Moreover , please make it to this time .

（また今度にしてください）

「It said ahead so and it ran away . Where of a general person who」

（前もそういつて逃げましたよね？こんな貧相で）

particular is seedy and is no aristocrat either is good?」

（貴族でもない一般人のどこがいいんですか？）

その一言に絀が珍しく声を荒げて反論する。

「There is no Mr . Endo in such a person . It is very gentle , reliable ,」

（遠藤くんはそんな人じゃありません！とても優しいし、頼りに

なるし)

and it a wonderful person trusted all."

(皆から信頼されてる人です!)

取られた手を振りほどいた紬がそう睨むと男の方も熱が上がっているようだ。

"only having to go out to come, it becomes unskilled the person."

(人が下手に出てればいいきになって!)

Do not joke."

(ふざけるんじゃない!)

そういった男が紬を突き飛ばした。そのせいでバランスを崩した紬が倒れてしまう。

「大丈夫、紬!」

茜雫が急いで駆け寄りどうにか支え起こす。しかし男は一番やってはいけない事を行った。

この男の前で仲間に手を上げるといふのがどういう事なのかをすぐ知る事になる。

"It is, and it is a spoiled aristocrat. Might not good the resolution."

(おい、腐れ貴族……。覚悟はいいだろうな?)

そういうとゆつくりと歩みよっていく。完全に喧嘩を売る様な主輔の態度にまた

怒りだした男が殴りかかってくるが今の彼に喧嘩を売る程馬鹿な行為はない。

即座に振り上げた腕から相手の背後を取り、脇から腕を回して首寝つこを掴みかか

り、そしてもう片方の手でベルトの部分を掴むとそのまま上に持ち上げる。

「It is a putting out point in my companion as for the hand」

（俺の仲間に手を出してんじゃねええええ！！！）

そのまま裏に体重をかけながら男を地面に叩き付けるプロレス技【ハーフネルソン・

ツープレックス】という脳天から真っ逆さまに落とされる危険極まりない技である。

無論、それを成す術無くくらった男は何もできずに伸びて気絶してしまった。

「Show the container who seems to be the aristocrat if you are an aristocrat」

（貴族だつてんなら貴族らしい器を見せろってんだよ）

Commonplace with only money is not called an aristocrat

（金だけしかない凡々は貴族とは言わないんだよ）

Remember, and foolishness」

（覚えておけよ、馬鹿が）

服についた土を払い落として捨て台詞を吐くと袖に手を差出して立ち上がらせる。

「大丈夫か、お嬢様？」

「もう・・・助けてくれてカッコよかったのにそういう事言っちゃ駄目よ、遠藤くん」

「悪い、悪い」

すると周りから突如として拍手と歓声が起こり始めた。

「な、何事だ？」

いきなりの事に圭輔が疑問に思っているとその理由を茜雫が説明しだした。

「よく上流階級でもない青年が無礼を弁えない者に制裁を加えたって褒めてるのよ。」

「まだこの日本にも侍がいるって言うてる人もいる感じね」

「いや・・・別に。琴吹に手を出しやがったんでついカッとなったんすよ、反省、反省」

過去にも同じような事をしてまた繰り返すわけにもいかないと自分を戒め、反省する。

そして袖が何かに気が付いたようにポケットからハンカチを取り出して圭輔の方に近づくと頬に手を添えてハンカチで圭輔の鼻や、額をそれで優しくふき取る。

「顔が土で汚れちゃってる、それに折角のお洋服まで・・・ごめんね、遠藤くん」

「別に構わないよ。俺が気まぐれでやっただけだ、お前が気にする事じゃない」

そっいつて自分の服の袖で汚れていた部分を噴水の水面に顔を映してふき取る。

「今時、随分といい心根をもっている青年ですな、お嬢様」

「ふふっ、わたしが気に入ってる後輩の男の子だからね。将来的に執事に欲しいわ」

なんだかともんでもない発言をされている気がするが圭輔はスルーする事にした。

変な凡々貴族のお陰で目立ってしまったと失敗したと思っていた圭輔だったのだが彼はまだ知らなかったのだ。

この日、そしてこの出来事から彼の日常は終わりを告げ、受難の毎日が始まるうなど

とはこの時の圭輔が知る筈もなく、呑気に紬から渡された料理に舌鼓を打っていた。

プロローグ～受難のはじまり？～（後書き）

次回のけいおん！ラブコメfff～紬の恋物語～は？

エピソード～同級生はSP？～

お楽しみに！

エピソード1 同級生はSP??

「はぁ・・・不幸だ・・・」

またもや深いため息を吐いている主人公の遠藤 圭輔。今日は学校なのだが彼は普段立ち寄る事がない駅前にやってきていた。しかも自転車持参で。

「やつぱりあんなに目立つ事やるんじゃないかった・・・」

そう事の発端は以前に紬に呼ばれていたパーティーでのプロレス技で貴族出身の息子を一撃KOした事件からだった。

あの後、彼は紬の執事をしている老紳士から呼び出されて注意をされるのかと想いきやなんと彼の考えていた遙か斜め上をいくような事を言い出したのである。

『紬お嬢様のSPをやっていたきたい。なにとぞお願いいたします』

いきなりそんな事言われて「はい、やります」など言えるはずもなくその場は逃げた

のだがその後、圭輔に不可解な出来事が連続で起きていた。

朝、何故か家の前に文が矢じりに巻かれて飛んで来たり、学校に行く最中に何故か地

蔵様が延々とつけてきたり、揚句には何故か飲んでいた缶コーヒ―に穴が開いたりと

不可解というよりかはどう考えても原因がはっきりしている事件が多発したのだ。

「このままいくとどう考えても俺は暗殺されてたよな・・・俺の平和な生活は一体」

平穩無事に高校生やって部活やつてもしかしたら恋もしてなんていう普通な生活を夢

見ていた圭輔の人生設計は脆くも崩れ去り、結局あの事件から3日後にまた家を訪れ

て執事の強制手段を使った商談の条件を呑む羽目になってしまったのである。

「学校から駅に行くまで警備しろだ・・・？揚句に俺のクラスを変えさせるなんて」

そして極めつけは圭輔の所属するクラスが紬のいるクラスに変えられており、それを

同級生達に言っても知らぬ存ぜんで通される・・・買収されたようだ。

「間違いなく茜雫先輩が噛んでるに決まってる・・・面白がつてやつたに違いない」

あの先輩は必ず圭輔に悪戯する癖があり、今回もそれ感覚で手を貸したに決まっている。

「それにしても琴吹も琴吹だ・・・何で家のSPをやらせたがらないんだ・・・？」

これについても軽く執事から聞いていたのだがそういう風にお嬢様という面をあまり出したくないらしく、色々と執事チームも上手く立ち回れなくなっているのだ。そこに現れた圭輔だった。ある程度、腕っぷしもあり、頭も回る、それに細も彼には信頼を寄せているようだし、同じ高校でクラスも同じにしていたのだらう。

「そして結局は圧力に負けた俺がいるってのも悲しいもんだぜ・・・」

というよりあのままいったら本当に自分の命が危ないとすら思ったからだった。

「おっとお嬢様の到着か」

ホームの方から紬が歩いてきて駅前で待っていた圭輔を見つけると駆け寄ってきた。

「あれ？遠藤くん、どうしたの？いつもは会っても橋のところなのにな？」

「お前のところの執事から琴吹のSPやってくれと頼まれてな。しかたなし・・・」

【・・・・・・・・・・キラーン】

「（ビクッ!?!）よ、喜んでやらせてもらったんだよ、あはははは・・・」

なんだ、さっきの悪寒はと圭輔は辺りを見回すが他の執事達の姿はないようである。

「ご、ごめんなさい。うちの者が迷惑かけて・・・、わたしが警護させないから無理矢理に遠藤さんに頼ませたんでしょ？」

「まあ・・・実際はそうなんだがな」

さすがに自分の家の人間だからよく理解はしているらしいが出来れば抑えて欲しい。

とりあえずは自転車に跨った圭輔は紬のカバンを本人はいいと言ったが問答無用で

引っ手繰り、カゴに入れて自分の後ろを指差して紬に合図してくる。

「????」

どうやら意味が分かっていないらしい。まあ、お嬢様ではやった事はないだろう。

「裏乗れよ、自転車でこのまま学校に乘せてくよ。途中で降りて証拠隠滅するけど」

「わ、わたし、2人乗りって初めて・・・!」

何やらとても嬉しそうなワクワクしている表情になっているが理由が分からない。

「(そういえば前にトランプタワー暇つぶしに作ってた珍しそう

に見てたな)」

やはりお嬢様ともなれば一般に圭輔の当たり前は珍しく見えるのか
もしれない。

「とりあえず乗れよ、んで俺の腰の辺りに腕回してしっかりとしが
みついてろ」

「うん、わかったわ。遠藤くん」

紬を裏に乗せた圭輔はそのまま少しふらつきながらも自転車を学校
に向け漕出した。

2人乗りなど久しぶりなのでバランスが取りにくいが紬の方も少し
ずつ裏に乗って
いる側のバランスのとり方が分かってきたのか彼に合わせてバラン
スを取る。

「ねえ、遠藤くん？」

「ん？」

「唯ちゃんか、真鍋さんのどっちかと付き合ってたりするの？」

「~~~~~?!?!?」

いきなりの暴投発言に動揺した圭輔がかなりバランスを崩し、紬も
慌ててしがみつく。

「お・お前な、どこをどう見ればそう見えるんだ。あいつらは幼
馴染、それだけだ」

「そうなんだ（うん）？でも2人の事を見てると違う気がするんだけど、うん？）」「

ここら辺は何となくの女の勘らしい。

「遠藤くんって音楽上手よね。なんでそんなに上手になれたの？」

「んゝゝゝ小さい頃から母さんと音楽を遊び感覚でやってていつの間にやら音楽ってのが自分の生活の中で当たり前な存在になってたからかな？やれて普通なのか」

母親はピアノが得意で一応、今もプロで活躍していると話すと細が驚きの声を上げる。

「も、もしかして遠藤くんのお母さんって遠藤 瑠佳さん！？」

「ああ、遠藤 瑠佳は俺の母親だけど何をそんなに驚いてんだ？」

「遠藤 瑠佳さんって言ったら世界的に有名なピアニストよ！わたしもピアノをやってるからファンなのゝアルバムも持ってるし、コンサートDVDもあるのよ？」

自分の母親のファンがこんなに近くにいるとは思わなかった圭輔も驚きである。

その後は昔の瑠佳との話などを聞かれたり、家にある瑠佳が使っていたピアノを今度、家に来て弾いてもいいなどまさかの母親話で盛り上がる事になった。

「へへっ♪今日は遠藤さんと初めていっぱい話しちゃったね」

「別に特別な事じゃねえだろ。同じ部活のメンバーなんだし、これからはお前専属の

SPになっちまったしな、話したきやいつでも出来るさ」

「遠藤くんみたいなボディーガードならいてくれてもいいよ?」

「そいつは光栄だね、紬お嬢様?」

「もう・・・そういうところはカッコよくない・・・」

少しふくれっ面になっている紬を見て軽く笑みを浮べる圭輔。しかしまずい人物に見つかる。

「あっ!ちよつと圭輔、2人乗りは禁止って前に教えたでしょう!止まちなさい!」

丁度、曲がり角で登校途中の幼馴染【真鍋 和】と出くわしてしまった。

「やべっ!どこそこのSPより怖い、冷酷生徒会役員に見つかった!逃げるぞ、琴吹!」

「れっつー!」

「こらあぁー!ー!圭輔、待ちなさい!後でとっちめてやるんだからー!ー!」

和の追跡を振り切った圭輔と紬の2人はそのまま学校の近くまでやってくるとそこで
紬に降りてもらい、何事も無かったかのように校門をくぐりぬける。
とはいえ追跡から逃れるのに加速したのでちょい息を整えているようだ。

「朝っぱらから自転車、高速漕ぎするとは思わなかったぜ。はあ、不幸だ・・・」

相変わらずの運の無さにため息が出てしまう圭輔を紬が苦笑しながら慰めていた。
自転車置き場までやってきて自転車を止めると紬が圭輔に頭を下げて言ってくる。

「でもこれからよろしくね、わたしのSPさん♪」

「しばらくは生徒会役員の冷血鬼から逃げ惑う事になりそうだけど・・・」

「だゝれが冷血鬼なのかしら？遠藤 け・い・す・け・くん♪」

「・・・（青）」

かなり優しいタッチで肩を掴まれて恐る恐る振り返ってみるとそこに立っていたのはとても優しい微笑みの仮面を被った幼馴染で生徒会の冷血鬼・真鍋 和だった。

「よお・・・よお・・・和。どうしたんだ？やけにご機嫌な顔じゃねえか・・・？」

「ええ、朝からどっかの誰かさんに素敵な挨拶かましてくれやがったからね？」

いつもの優等生キャラはどこへの完全キャラのゲシュタルト崩壊とツッコまざる得

ない口調の和に幼馴染を長くしている圭輔はすぐに察知出来た。

この和の状態はまずい、非常にまずい。どれくらいか？漆黒の死亡フラグ級である。

「琴吹さん、ちょっとこの馬・・圭輔、借りてくわね？ちょっとS Pの心得を叩き

込んでちゃんと仕事が出来るように調きよ・・指導してくるから

」

ただの高校生のお前がどうやってS Pの心得教えるとツッコんだ圭輔だったがそれ

どころではない。このままいくと間違いなく折檻フルコース確定である。

「緊急回避！」

するとブレザーのボタンをはずして上着だけ脱ぎ捨てるとそのまま紬の背中を押し

ながら和から逃げる様に全力疾走でその場を離れる。

「こらああああ！！待てって言うてんでしょ！圭~~~~~輔~~~~~！

」

どうにも幼馴染の圭輔相手には容赦のない和はすぐさま2人の後を

追いかける。

「逃げる♪逃げる♪」

「楽しんでないで走れ！冷血な鬼追跡者は容赦ないぜ、お嬢様！」

「前言撤回！調教じゃなくて執行猶予抜きの即死刑に処さないとわかんないのね！」

何故か持っているカバンに力を込めながら追いつく間際で大ぶりのスイングをかます。

「うおっ！？てめえ！！俺を殺す気が、馬鹿和ー！？」

「あんたが逃げるからでしょ！？SPなら潔く犠牲になりなさー！
くーい！」

「SP＝身代わりってどういう神経だっつうの！？断固、断る！！」

「はっはっはっははっ」

こういう馬鹿騒ぎをするのも初めてだったのか嬉しそうに紬はケラケラと笑っている。

こうして圭輔と紬の不思議なSPとお嬢様の関係が始まるのであった。

エピソード1〜同級生はSP〜（後書き）

次回のけいおん！ラブコメff〜紬の恋物語〜は？

エピソード2〜訓練！〜

お楽しみに！

エピソード2「特訓」

「はぁ・・・不幸だ・・・不幸過ぎる・・・」

紬のSPに任命されて数日、またもや圭輔は深いため息を吐いていた。というのもち

こ数日は彼にとっては過密ハードスケジュールになっているからである。

今日も朝、家を出る1時間以上も前からある人物に叩き起こされここに連れてこられた。

「やるわね、遠藤君。うちの男共を相手に全勝するなんて」

そう、彼は今、茜雫が所属している空手道場に来ているのだがそこでSP用のスーツ

に携帯棒を持って床で大の字に荒れた息を整えていた。

その周りにはボッコボコにされて伸びている空手道場の男共だったのだがようするに

彼らを相手にSPとしての体術だったり、身のこなしを特訓の一環としてやっている。

「つつか・・・段もちをいきなり10人相手ってなんなんすか、先輩・
・！！」

「あら？でも練習にはもってこいでしょ？手練れだし、体格も外人並だし」

そういう問題じゃないと頭を抱えながら深いため息を吐くしかない
圭輔の前に今度は
茜雫が立って帯を締め直すと構えを取った・・・ようするに次はわたし！らしい。

「ほら、次はわたしよ？最近手応えのある相手がいなくて退屈してたのよね♪」

絶対にこの人遊んでやがると内心想いながら立ち上がり、構え直す圭輔。

「ハアツ！！」

茜雫の鋭い正拳突きが飛んできて腕で流し警棒を振るが避けられ反撃をされる前に
前蹴りで弾き飛ばして距離を取ったと思わせて着地と同時に踏み込み前蹴りを当てた。
だが茜雫もわざと体勢を崩しながら無理矢理回し蹴りを放ってそれがかすった。

「まだ、まだ！！」

そういつて前蹴り、回し蹴りの連続からまた正拳を繰り出してきたのを見逃さなかず
に絶妙なタイミングで腕を取り、そのまま飛び上がりながら足を腕に絡めて後転と同時
時に腕拉ぎ十字固めに流れる様に行き、完全に動きを封じた。

「くっ・・・負けたわ・・・」

「へへっ、やっとこ完全に先輩に土付けましたね」

今迄何度か対戦はしてきたが完全に勝ったというのが無かったのが初勝利である。

「またお願いするわね。さらに鍛えて今度はあなたに土をつけて見せるから」

何やら余計に火をつけてしまったようでその顔には不敵な笑みが浮かんでいるのだが

内心、やり過ぎたなと圭輔は後悔するのであった。

それからしばらくして道場にわざわざ駅から紬がやってきたようでは呼ばれた。

「遠藤くん、おつかれさま」

「ありがとうございます、お嬢様？」

「むう・・・遠藤くん、いつもわざと言ってるでしょう・・・！」

「最近、思ったんだが案外、怒ってむくれてる琴吹の顔ってのも可愛いがしてな」

「えっ？ええっ？（照）」

そんな事を目の前で言われてしまった紬の方が顔を赤くして黙ってしまっている。当の

本人は「何で顔が赤い？」などと理由はまったく分かっていない様だ。

「それにしても遠藤くんって強いよね。あんなに身体大きい人倒しちゃうんだもん」

「まあ・・・お前のところの執事長から軍隊式の柔術やらを叩き込まれたからな。つつ

か寝込みまで襲われたことあるから・・・凄え爺さんだぞ、あの人」

いつ襲われるかと冷や冷やしながら毎日を過ごしていた。かなり切実なようだけれんなりと疲れた顔をする圭輔を苦笑いを浮かべる紬だった。が何かに気付いたのかポケットからハンカチを取り出して背伸びをしながら圭輔の左頬を優しくハンカチでふき取る。

「ちょっと血が出てるよ、遠藤くん？痛くない？大丈夫？」

「あ、ああ・・・これくらい何とも無いって。心配するなよ、琴吹・・・（照）」

改めてみると紬は人気があるのが分る。密かに彼女にはファンクラブが存在していた。

「ふふっ、圭輔くん？何で顔が赤いの？」

今度は紬が面白いモノを見つけた悪戯っ子のような笑みを浮かべてそう言ってくる。

「うっ、うっさい！」

「よぉ〜す！ご兩人、今日も朝からお暑い――」

「よぉ〜、お前は朝からサブミッションがお好みか、そうか、そうか」

そういつて圭輔にナックルヘッドロックを掛けられているのは性懲りもなくちよっかいを出していた『田井中 律』でそのまま前のめりに万力並に締め上げられる。

「痛つつつ！？おまつ！痛いって！ていうかスカートの中が見えるだろ〜〜！？」

前のめりになっているのでただでさえ短く履いているスカートの中が見えそうだった。

「お前な、毎度、部室で人の眼の前で胡座かいて座ってるのはどのどいつだ？」

「だって遠藤って安全牌じゃん。見せても別にいいかな〜的な軽い感じ？」

「お前は俺を馬鹿にしてるのか？そうか、そうだな、そうなんだな？」

「だから締め上げを強くするなああああ！？痛い、痛い？！」

「はっはははっ」

そんな2人のやりとりをととても可笑しそうに笑っている紬を見て圭

輔もつられて笑っていた。

「おお、旨そう」

昼休みになって紬に誘われて圭輔は校舎庭にやってきてすでに黄色のシートが敷いてある。

「家の者がいつも迷惑をかけてるしこれくらいしか出来ないけど食べてみて」

ちょっと大きめの弁当箱にはおにぎりに色とりどりの定番のおかずがぎっしりと入っていてとても食べ応えがありそうで早速、食べてみる事にした。おにぎりはノーマルもあるし、ふりかけを塗して種類豊富に作っているし美味かった。

「琴吹って料理上手なんだな？俺も料理は得意な方だけど味付けもいい感じだ」

「本当？ありがとう、遠藤くん。誰かにお料理を褒めて貰ったのって初めてなの」

「初めてってよく部活にお菓子とか作ってくるじゃん」

お菓子はあるかあもしれないがお弁当を誰かに作ってきたのは初めてらしく料理ができる圭輔に褒めて貰えたのは嬉しいようだ。

「俺的にお嬢様って家事能力がないというドラマ的イメージがあったんだがな（笑）」

「遠藤くん、それはテレビの見過ぎよ（笑）」

そんなのどかな気分に浸っていた圭輔だったが訓練によって感覚が鍛えられたのか一瞬

寒気が奔って顔を上げると2階の窓に一瞬だったが光るモノを見つ
ける。

「!？」

反応が間にあつて身体を投げ出す様に避けると圭輔のいた場所に何
故かプラスチックで

出来たダーツ型の弾が刺さっており、窓の方を見直すとすでにいな
くなっていた。

どうやら学校にまで圭輔を鍛えるために紬の家の執事達が来ている
ようで監視されている。

「たくっ・・・学校に来ても休む暇なしかつつの・・・!」

腰につけていた警棒を取り出して狙撃犯を撃退しに行こうとするが
紬に止められた。

「わたしにいい考えがあるの!」

「?」

この時、圭輔は後悔する事になる。いう事を聞く前にちゃんと聞いて
おくべきだったと。

「琴吹さん?」

「どうしたの、遠藤くん？」

「一体、何をなさっておられるのでしょうか？」

「くつついてみたの」

ようするに圭輔を狙えない様に彼を座らせて紬が彼を背もたれ代わりにでもするよう

に寄りかかってそのまま木の木陰に隠れるようにして休み始めたのだ。

「これで遠藤くんも安全よね」

「いや・・・たぶん・・・余計に危険が増えた気がする・・・」

圭輔は背筋に冷たいモノが通っていた。さっきからくるこの視線は間違いなく執事長であからさまにその視線は殺意が混じっているようである。はつきり言つとたぶんあの茂みから感じる黒いオーラで間違いなさそうだった。

「琴吹」

「はい？」

「逃げるぞ！！！！」

「えっ！？えっ？ひゃう！？」

そういった圭輔は寄りかかっている絢を抱き抱えてそのまま一目散に逃走する。

「遠藤殿才おお才才才！そこに直られよおおおおお！！！」

裏からはやはり黒いオーラを放出しながら追いかけてくる執事長with
ith 真剣装備。

「銃刀法違反で捕まるぞ、執事長！！つつか学校でなんてもん振り回すんだああ！？」

「お嬢様を不届き者から護る役目を負いながら！その不届き者になるとは万死に値する！」

「あんたら人の和みの時間に武力介入するからだろうが！？少しは自重しろっての！」

[キIIIIIIIIII-III! ! ! !]

「聞いてねえし!!!このおっさん!!!」

細を抱き上げたまま鬼から逃走する圭輔。

「こらあ！！圭輔、廊下を走るんじゃないの！また執事さんに迷惑かけたのね！」

「てめえの眼は老眼か！？注意する方間違ってるはこの大馬鹿野郎
！！」

「老が……!?大馬鹿……や……ふっふっふ……まっちなさ

「い！圭輔——！！」

何故か鬼が2人に増えた。

「だああああああああ！！！！不幸——だ——！！！！」

紬はというとこんな状況だと言うのに笑いながら楽しんでしまっていた。今迄ずっと自分を抑えていた彼女にとってこんなに賑やかで心の底から楽しめている学園生活は憧れでそんな中に自分が入れる事が嬉しくてしうがなかった。

「遠藤くん！」

「なんだ、琴吹！？今、デットオアライブな鬼ごっこ中なんだ、話かけるな！？」

「もつと遠くまで突っ走れ！GO！GO！」

「このお嬢様は・・・人の不幸まで楽しまないでくれ・・・とほぼつ・（泣）」

圭輔の受難の学校生活はまだまだ続く、続くったら続く！

エピソード2の特訓！(後書き)

次回のけいおん！ラブコメffの紬の恋物語は？

エピソード3の2人で訓練！

お楽しみに！

エピソード3〜2人で特訓！〜

圭輔「はぁ・・・不幸だ・・・毎度の事ながら不幸でしかない・・・」

「

紬「ごめんね・・・遠藤くん」

例の如くいつもの台詞を吐きながら肩を落とす圭輔を横で紬がすまなそうに慰めていた。

今度は何があつたかと言えば主要原因は茜雫で彼女主催の舞踏会に紬も呼ばれたらしく

そのペアが何故か勝手に圭輔に決められてしまっていたのだ。

しかも辞退も出来ない。こういった社交界で有名になればなるほど出席の是非が重要に

なってくるわけで彼女に恥をかかせるわけにもいかずすでに退路は無かった。

圭輔「しかも後、一週間で社交ダンス覚えろだ・・・？いい加減にあの爺さんキレるぞ？」

もちろん社交ダンスなど踊った事もない圭輔。

しかたがないので紬に頼んでダンスのレッスンを彼女の指導の下、覚える事になったのだ。

圭輔「えつととりあえず最初はこうでいいのか？」

紬の指導の下、最初の待機時の立ち振る舞いから教えてもらい、基

本の動きに映る。

紬「それからこう・・・そう・・・でこうステップを踏んでいくの」

そしてステップだけを2人で練習する。まずはこれが出来ないと始まらないのである。

だがそこは呑み込みが早い圭輔は2時間ほど練習した頃にはステップが様になってきた。

紬「そうそう、遠藤くん上手、上手」！

まるで自分が出来たかのように喜ぶ紬。なんとも純粹だなと苦笑する圭輔。

圭輔「まあ、お嬢様に恥はかせられないかな」？

紬「むう・・・、遠藤くん、そういうところはカッコ悪いって言うてるのに」

またむくれた顔になる紬を見てケラケラと笑いながら2人でダンスの練習を続けた。

・
・
・
・

紬「おじゃまします」

叶「あつ、兄さん、おかえり。そちらの方は・・・？」

家にはすでに妹の『遠藤 叶』もいて2人を出迎える。とりあえず

は自己紹介だ。

叶「わたしは妹の遠藤 叶と言います。いつも兄がお世話になってます」

紬「いえいえ、わたしの方こそお世話になりっぱなしよ？あつ、琴吹 紬です」

そんな挨拶も早々に2人は圭輔が普段、音楽の作詞作りなどをして
いるアトリエに

やってきて今回のお目当てというか、目的のモノがそこにはあった。

紬「わあゝ・・・♪これが遠藤くんのお母さんが使ってたピアノ？」

このピアノは圭輔が子供の頃から彼に音楽を聴かせていたモノでこのピアノの演奏

から生まれた代表曲もあるようでドキドキしながら紬がピアノに触れる。

あの世界的なピアニストが引いていてしかもこのピアノから名曲が生み出されたの

だから同じピアノをしていてファンの紬からすればこれほど嬉しい事はない。

紬「すごく手入れがされてる・・・それに・・・（ゝ）音もとてもいい」

圭輔「まあ、ここの楽器は毎日、手入れしてるからな。俺の相棒達だしさ」

子供の頃からずっと自分に音楽の楽しさを教えて辛い時でもこの楽

器達を演奏して

いるときは何故だか辛い事も乗り越えられた。

色んな意味で彼を今まで支えてきた音楽をする上で頼もしい『相棒』だった。

紬「遠藤くんも弾けるの、ピアノ？」

圭輔「まあ、母さん程じゃないけどそれなりならな。弾いてみるか？」

紬「うん、お願い」

【BGM ザナルカンドにて】

優しくも物悲しげな雰囲気のパianoの曲が部屋に流れる。紬は目を閉じてその音色に聴き入っていた。

さすがに世界的なピアニストを母親に持つだけに彼の腕もなかなかのものだった。

紬「いい曲ね・・・」

この曲は幼い頃の圭輔に母の瑠佳が送った曲らしく、普段から一緒にいてやれない

彼を悲しみながらも母親としていつも一緒にいるからというメッセージを伝えたい

と思って書いた世間にも出ていない瑠佳直筆のオリジナル曲なのだ。

紬「遠藤くんのお母様が遠藤くんのためだけに書いた世界で1つだけの曲なのね」

圭輔「同じ旋律の繰り返しなんだけど何でかこれを聞くと気持ちが落ち着くんだよな」

それから子供の頃の思い出や他に発表されていない美香の作詞の曲の演奏など2人で
ゆったりとした時間を過ごして一日は過ぎて行った。

・
・
・
・

執事長「遠藤殿はどんなされたのか。まだ来ておらんようだ」

執事A「たしか連絡で妹さんの合唱コンクールを見てから来るそうですよ」

執事B「たしか遠藤君の家は彼と妹さんの2人暮らしで両親は公演などで家を空け

てるんで彼くらいしか行事ごとを見る人がいないみたいです」

今日はその社交界パーティの当日で圭輔は妹の叶が出ている合唱コンクールに保護者

代わりとして見に行くために遅れてやってくる事になっていた。

そしてしばらくして高級車に乗って会場に到着した紬にもそれが知らせられる。

紬「そうなの・・・遠藤さんのピアノ、皆さんに聞いて貰おうと思ったのに」

執事長「心配なさらずとももう少しすれば来るでしょう。さあ、お嬢様」

紬「はい」

先に紬と執事長達は会場入りしたのだが一方の圭輔には危機が迫ろうとしていた。

・ ・ ・

叶「あつ、兄さん。ちゃんと見に来てくれたんですね」

圭輔「まあな。先生に早退させてもらって来たんだ、下手な歌だったら野次つてや

ろうかと思ったがいい感じだったじゃないか」

叶「音楽得意な兄さんと一緒にしないでください。あれでも必死だったんですよ？」

遙「カナちゃん、圭お兄さん！」

そういつて駆け寄ってきたのは叶の親友で圭輔の妹分でもある『神崎 遙』だ。

圭輔「さてと紬の社交パーティーに行くとするか。はあ・・・何気、緊張するは」

強心臓の彼とは言え、初めての大きな舞踏会に社交ダンスという事で柄にもなく緊張

気味であるがとりあえずは途中まで3人で行く事になった。

叶「兄さん、ちゃんと琴吹先輩に恥をかかせない様にしてくださいね？」

遙「圭お兄さんのタキシード姿あゝ、カッコいいですね！」

叶「いや、孫にも衣装よ」

圭輔「そうか、そうか、お前は兄に喧嘩を売りたいらしいな。うん、うん」

そういつてヘッドロックからの鉄拳ぐりぐり攻撃に移行する連続コンボが叶に決まった。

遙「わわわっ！カナちゃん、スカート見えちゃうよ！？」

叶「に、兄さん！？いきなり何するんですか、非常識です！」

圭輔「お前が兄を大切にしないのが悪いんだろ？。毎日、3食作ってやってんだ。」

叶が少しくらい料理スキルあれば俺も楽出来るんだがよ？」

実は文武両道、性格よしな彼女だが料理スキルは0。作ると何かを失敗するのだ。

そんなやりとりをしながら歩いていると前に黒ずくめの男が2人現れてSPとして

訓練してきた圭輔はすぐに相手が只者ではない事を理解した。

さらには裏にまで2人現れてその真ん中に見覚えのある顔の男が現れた。

圭輔「お前はこの前、俺に失神させられた貴族の息子か」

子息「（この間はよくもやってくれたな。ここで君には痛い目にあって貰うよ、そ

して踊り手のいない彼女にも社交界で大恥を掻いて貰う）」

どうやらこの間の腹いせに自分のSPを連れてきて仕返しにやってきたらしい。

叶「兄さん、この人達は……」

遙「圭お兄さん……」

圭輔「叶、遙、俺が合図したらそっちの車の陰に隠れる。そんで顔出すな」

小言を言つて2人に指示を出すゆつくりとすり足で位置を車へ向かわせ警棒を出す。

子息「（やれ!）」

一斉に襲い掛かってくるSP4人。

圭輔「2人共隠れてろ!」

叶「遙!」 遙「う、うん!」

車の後ろに隠れて襲ってきた相手を片方をもう2人がいる方向に流して襲ってくる方向

を1つに限定して叶達の壁になるように護る。

子息「（それではごゆっくり。紬さんは僕がお相手してあげるよ）」

そういつてSPに後を任せてその場を立ち去った。

SP1「Drop dead！（くたばれ）」

殴り掛かってくるのを受け流して警棒の突きと即座に隙を見つけた警棒の打撃を合わせ
て左右からくる相手の攻撃を相手に体重を任せるような体当たりから一旦引いて肘打ち
、警棒の柄をそのまま喉元に叩き込み、怯んだところに後頭部のかかと落としを放つ。

SP1「Ouch!？」

SP2「Shit! Hold down！（くそっ！押さえる!）」

もう1人が圭輔に体当たりをくらわそうとするがそれを裏に飛び退きながら避けて丁度
自分の脇の下に首をいれさせてそのまま前かがみの体勢の首を上
締め上げる総合格闘
技の絞め技・フロントチョークを決めてそのまま一気に締め上げた。

圭輔「寝てろ」

そしてトドメに力が抜けた相手を技から解放して上から肘、下から膝のプレス攻撃で顔
に強烈な一撃が炸裂して1人は完全にノックアウトされてしまう。

SP3「OOOOOOOOH!!!」

雄叫びを上げながら凄まじい連続攻撃を繰り出してくる。それを避けながら隙を窺うの
だがその隙にもう1人のSPが叶達に襲い掛ろうとしていた。

主輔「させるか！」

攻撃を避けて裏に蹴り飛ばし、その反動で車のボンネットを転がりながらボンネット上で顔面に蹴りをいれた後に両手で振り被った警棒を相手の急所に向けて下から真上に振り抜いて掟破りの急所叩きで怯んだSPを警棒の柄で後頭部を叩き、気絶させる。

遙「主お兄さん、凄い、凄い〜！」

叶「兄さん、あんまり無理しないで・・・！」

主輔「いいから隠れてろ！！頭出すな、絶対に守ってやるからじっとしてろよ！」

残りの2人で襲い掛ってきたが警棒を駆使して体術を防がれ、反撃をくらい、怯んだ

ところに畳み掛けて警棒と体術を駆使した戦法で高校生がSPを押していた。

さらにここで援軍がやってくる。

早苗「面!!!!!!!!!!!!!!」

SP3「GYAAA!？」

遙「お母さん!」

圭輔「早苗さん!？」

この人は遙の母親で圭輔達のお隣さん、尚且つ両親がいない間の親代わりをしてくれている人で『神崎 早苗』でかなり腕っぷしが強く剣道も師範代らしい。

マスター「ほっほっほ。圭輔坊ちゃん、このマスターめも助太刀いたしますぞ」

圭輔「つつか、マスターまで!」

さらには圭輔の母親の元執事で今現在はこの街で喫茶店を経営していて圭輔にとって男として憧れる老紳士であるが全てが謎な人物で圭輔に元々の腕っぷしの強さを教えたのはこの人で今の段階の圭輔でも勝てない程に何故か強い。

早苗「圭ちゃん、早くいきなさい。女の子に恥かかせる男は漢失格よ!」

マスター「叶様も遙様も一緒に。後は、わたくしめらにお任せください。さあ、早く」

圭輔「ありがと、マスター、早苗さん!叶、遙、行くぞ」

叶・遙「うん」「はい」

そっいつて2人の手を取ると紬の家へと急いで走る。

SP2「stop!」——Oh!?!」

しかし長刀を喉元につきつけられて動きを完全にマスターに封じられた。

マスター「圭輔坊ちゃんは奥方様よりお預かりしている大切なお方・
・その方に手

を出すとは不屈き為り。まずはその捻じ曲がった性根からですな」

早苗「久々に腕がなるわあ~~~~」

そして響くSPの断末魔。

SP2・4「NOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOO——
|.....」

・ ・ ・ ・

執事長「遠藤殿は何をしているのだ!もう舞踏会が始まると言うのに」

時間になっても現れない圭輔を慌ただしく探し回る執事達だったがここには来ていない。

紬「遠藤くん・・・どうしたのかしら」

茜雫「紬、もうそろそろ舞踏会が始まるわよ？遠藤君はどうしたの？」

執事長「いえ、遠藤殿がまだ会場に来ておらんのです。何をしておるのか・・・！」

すると紬達の前にさきほどSP達に主輔達を襲わせて悠々とやってきた子息が現れる。

子息「（あの男なら待つだけ無駄ですよ。もうこっちはこれないでしょうから（笑）」

紬「！（彼の事知ってるの？いえ、彼に何かしたの！）」

すると不敵な笑みを浮かべながら話を続ける。

子息「（あなたが悪いんだ。僕の話に大人しく乗っていればいいのに、生意気にも逆

らったりするから。あの男も不幸だったんですよ、はっはっはっは！）」

紬「・・・！！」

そいつって手を振り上げた紬。自分でもこんな事をしたのかは分からないが感情がおさえきれずに身体が動いてしまったのだ。

圭輔「ちよいと待ちなよ、お嬢様？」

しかし振り被ったところで腕を掴まれ、振り返るとそこには濃いグレーのジャケット

に黒のシャツとズボンに白のネクタイ姿の圭輔で突然の登場に絀も驚く。

子息「（そ、そんな！？なんでお前がここに！）」

圭輔「（決定的な人選の差だろ。こつちには最強二枚看板がいたんでな）」

そして子息は執事達に取り押さえられる。そして入り口にはさっきのSP達を縄で簀巻きにしている早苗とマスターの2人の姿があり、圭輔に歩み寄る。

マスター「ほっほっほ。坊ちゃん、どうにか間に合われたようですね」

執事長「あ・・・あなたはまさか伝説の執事・神童様では・・・！！」

圭輔「へっ？マスターって神童っていうの？」

執事長「これ！？言葉を慎まなか、この方はかつての大企業・神童グループの執事

長をしていらした。社長より自分の家族に迎えられて執事界においてもそ

の手腕と渾身的な支えから伝説とまで言われるお方だぞ！

？」

圭輔「マスターって・・・そんなに凄い人だったのか。いや凄いと
は思ってたけど」

改めて身近な人の秘密をしった圭輔はかなり驚いてしまった。

マスター「ほっほっほ。今はしがない喫茶店のマスター、そして圭
輔坊ちゃんの叔

父代わりのようなものですぞ。時に執事長・・・」

執事長「は、はい！」

マスター「圭輔坊ちゃんはお嬢様よりお預かりした大切な子
息・・・もしも

の有事ありしときは・・・分かっておりますな？」

圭輔でもビビる事がある執事長がまるで借りてきた猫のように萎縮
してしまっていた。

茜雫「それより遠藤君、舞踏会が始まるから早く絀と来なさい」

そういつて前を歩き出す茜雫に絀も圭輔の手を引いて微笑みかける。

絀「いこ、遠藤くん」

圭輔「おう！」

なのだが何故か圭輔と絀が立たされたのは会場のセンターと真ん中
で踊る事になった。

社交界では顔を知られていない青年が有名どころの紬と踊っている
ので自然と注目を
集めている上にお隣には茜雫と外国の紳士と踊るようでさらに注目
の的だ。

圭輔「案外、緊張するもんだな」

紬「遠藤くん、リラックス、リラックス。落ち着いてやれば大丈夫」
そういつて圭輔の両手をギュッと握りしめて柔らかい笑みを浮べて
励ます。

圭輔「ははっ、琴吹には最近、ずっと励まされっ放しだな」

だが何故か、紬がちよっとむくれた顔になる。

紬「遠藤くん、ずっと琴吹って言ってる。仲良くなったのに他人行
儀」

圭輔「あゝ・・・まあ、SPになって随分と一緒にいたわな、
前より」

要するにもうちよつとフレンドリーに呼んでほしいらしい。

圭輔「それじゃ、唯達みたいに『ムギ』っていいかい？」

紬「うん、それでいい」

しかしここで圭輔にちよつとした悪戯心が湧いてきたようだ。

圭輔「そんじゃ、お前も俺の事は『圭輔』って言えよ。お前も遠藤じゃ他人行儀だぜ？」

仕返しに自分の事も名前で呼べという事らしい。

紬「むうゝ・・・遠藤くん、分かってて意地悪してるでしょ・・・」

圭輔「遠藤、じゃないだろ？ムギ？」

ちよつと顔を赤くして彼の名前の方を呼ぶ。というより男を名前で呼ぶのは初めてだった。

紬「圭輔くん・・・（照）」

上目遣いで言われたのが思いのほか破壊力があつたのか圭輔の顔が少し赤くなって

妙に心臓の動悸が止らないのだがそこはどうか冷静さを装う。

すると会場に緩やかな音楽が流れ始めて照明が落ちると2人の場所だけがライトア

ップされていきなりの事に圭輔の方は何事かと啞然としてしまった。

茜雫「まずはあなた達が最初よ、それから皆さんのダンスが始まるの」

いきなりで驚いたがここまでできてしまったらやるしかない。2人は視線を合わせた。

紬「さあ、踊りましょう。圭輔くん」

圭輔「ああ、ムギ」

そしてゆっくりと踊りだす2人。この日のためにずっと練習してきた2人の息はぴったりで優雅に柔らかく、中央のスポットライトでダンスを踊る。段々と固さもとれて笑顔を浮かべながらちよつと練習とは違ったアレンジを加えてみたりだとか紬と圭輔は周りなど気にもせずに2人だけの舞踏会を続けた。

・ ・ ・

唯「へえ、圭ちゃんとムギちゃんがダンス踊ったんだ！」

澪「そんな大勢の前で踊れるなんてやっぱり圭輔って強心臓だよな」

圭輔「いや、結構、俺は俺で緊張したんだぞ・・・？」

次の日、圭輔と紬は部室で昨日の話をしながらいつものようにお茶を楽しんでいたのだが律が2人にちよつと皆の前で踊ってみてくれと言い出した。

紬「わたしは構わないよ」

圭輔「まあ、嫌だといっても踊らされるだろうしな。やるか、ムギ」

紬「うん、圭輔くん」

ここで2人の変化に澪が気付く。

漣「あれ？2人共、いつもと呼び方が違ってる」

唯「うん、圭ちゃんはいつも『琴吹』でムギちゃんは『遠藤くん』だったのに」

圭輔「ムギお嬢様から他人行儀だからやめろって言われたんだよ？
なあ、お嬢様？」

紬「だからそういう圭輔くんは意地悪で嫌いって言ってるでしょー
！」

そいつって恐らくは頬を抓ろうとしたのか背伸びをするのだが裏に
体勢を引いた圭輔
に支えを失った紬はそのまま前のめりに倒れ込んでしまう。

紬「きゃっ！」

慌てて紬を支えようとすぐに身体を戻したのだが・・・ラッキース
ケベスキルが発動した。

律「あっ」

漣「はわっ！？」

唯「あわわっ・・・！？」

圭輔・紬「へっ？」

支えたまではよかったのだが手が柔らかいモノに触れていた。とい

うか軽く掴んでいる。

紬「き・・・き・・・!?!」

圭輔「(・・・これは・・・あれだな)」

紬「きゃあああああああああああああーーーーー
ーーーー!?!」

そして今日も学園にはこの声が響き渡るのだった。

圭輔「不幸だあああーーーーー!?!?!?!」

・ ・ ・ ・

和「んっ?・・・圭輔の奴、また何かやらかしたわね。まあ、今日も平和かしら」

何が平和なのか分からない発言をしながら不幸にあっている幼馴染に細やかながら
祈りを捧げる和だったがしばらくして圭輔が保健室に運ばれたのは言うまでもない。

そしてやっぱり続くたら続く!

エピソード3〜2人で特訓〜

（後書き）

次回のけいおん！ラブコメfffの紬の恋物語は？

エピソード4〜SPとお嬢様の不思議なデート？〜

お楽しみに！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9827t/>

けいおん！† - ラブコメ f f - † ~ 紬の恋物語 ~

2011年12月22日00時48分発行